

アクティブ・ラーニングを取り入れた英語授業の実践例*

林田朋子** ジョセフ・ロメロ**

Teaching English Through Active Learning : Focusing on English Classes for University Students

Tomoko HAYASHIDA**, Joseph ROMERO**

キーワード：アクティブ・ラーニング、内容重視型教授法

1 はじめに

日本の英語教育においてコミュニケーション能力の重要性がとらえられて久しいが、いまだ学習者主体の授業実践が実現されているとはいいがたく、そこには日本の英語教育における歴史的な変遷や文化的背景が強く影響しているものと思われる。グローバル化やAIなどの技術革新を背景として、思考力や判断力を育成し、学生の主体的で深い学びを促進することは、大学における英語教育においても求められていると言えるだろう。このような要請にこたえるべく、英語教育においてもアクティブ・ラーニングを授業に取り入れる力が英語教師に求められている。本稿は、日本人講師と外国人講師の2人の筆者が大学で行ったアクティブ・ラーニングの実践例を紹介するものである。実践例(1)は、日本人講師が国立大学の課外授業で行ったオーセンティックな英語教材を用いたアクティブ・ラーニングの実践例である。実践例(2)は、外国人講師が私立大学の英語コミュニケーションの授業で行ったアクティブ・ラーニングの実践例である。

2 アクティブ・ラーニングとは

文部科学省(2013)によると下記のように定義されている。

伝統的な教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学習者が能動的に学ぶことによって、後で学んだ情報を思い出しやすい、あるいは異なる文脈でもその情報を使いこなしやすいという理由から用いられる教授法。発見学習、問題解決学習、経験学

習、調査学習などが含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワークなどを行うことでも取り入れられる。(文部科学省 2013 p.55)

上述のように、アクティブ・ラーニングの定義は広く、科目の特色、また学生の学習目的、学生のレベル、学生数などの学習環境により、様々な方法が考えられる。アクティブ・ラーニングの要素を以下の4点に分類してみよう。

- ① 学習者の能動的な学習への参加
- ② 情報を使いこなすこと
- ③ 発見学習・問題解決学習・経験学習・調査学習
- ④ グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク

①～④の中で、①の「学習者の能動的な学習への参加」はアクティブ・ラーニングの中核的な理念と考えてよいだろう。特に、日本の伝統的な教授方法が教師中心の座学であったことをふまえると、「学生の主体性」を主軸においた授業計画を立てる工夫が必要である。②の「情報を使いこなす能力」については、英語の産出活動(アウトプット活動)のあり方を捉えなおす必要がある。例えば、英語学習者が、教師や音声教材を復唱し、すでに書かれたものを音読するなどの活動が英語の産出活動(アウトプット活動)と思われがちであるが、英語で音読したものを自分の言葉で説明し、自分の意見を述べるなど、より主体的な活動へと展開させることが求められる。③・④は、アクティブ・ラーニングの具体的な活動方法であるが、学習目的や学習環境によって、柔軟に選択し、英語指導に取り入れるべき要素であると考える。筆者が行った英語授業の構成の中でも、

* Received December 21, 2018

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 外国語学科 Faculty of Contemporary Social Studies Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 850-0092, Japan

①～④の要素を取捨選択し授業計画の中に取り入れている。特に、④の「グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク」は、学生の既存の知識を喚起し、思考力・判断力を育成する活動として、積極的に取り入れるようにしている。

3 実践例（1）：

課外授業における英語授業の実践例

3.1 授業の概要

実践例（1）として、国立大学で行った課外授業の一環としての英語授業（以下：英語カフェ）について説明する。まず、対象者は国立大学に在籍する大学1～3年生（10～20人）である。学習目的は、将来英語圏に1年以上の長期留学することを目標とし、アカデミック・イングリッシュのスキルを学ぶことである。単位取得を目的としない自主参加型の英語授業であるため、参加者の学習意欲は高く、学習動機も明確である点が特徴である。将来の留学という明確な目的に対応するために、オーセンティックな教材を用いることで、アカデミック・スキルを育成することを主要な要素としてアクティブ・ラーニングを実践した。以下では、筆者が行ったTED talkを用いた英語カフェの実践例を紹介する。授業時間は90分間であり、授業は全て英語で実施した。

3.2 オーセンティックな教材の使用

本授業では、学術・エンターテインメント・デザインなど幅広い分野の専門家による講演である、Technology Entertainment Design (TED) を教材として用いた。TEDは、世界中で活躍する著名人を講師としており、オーセンティックな英語教材として注目を集めている。本授業の対象者が、将来英語圏への留学を目的としていることから、できるだけナチュラルスピードの英語に慣れること、最先端の話題に触れることを狙いとして、TED talkを教材として選択した。実践例で用いた動画は、世界的に有名なシェフであり、社会活動家でもあるJamie Oliver 氏が行った「Teach every child about food」という講演である。Oliver氏はイギリスのエセックス出身であるため、英語のアクセントや発音に特徴があり、話すスピードも速いため、聞き取りの難易度は高いと思われる。また、随所にイディオムやスラングが用いられており、学習者にとっては聞きなれない語句が含まれている。内容は、現在アメリカで

深刻な問題となっている「肥満問題と食育」についてであり、インタビューやグラフ解説などを用いて、視覚的にも分かりやすい内容となっている。わからない単語がある中でも、講演者のスピーチの主題を理解することを目的として授業構成を行った。Jamie Oliver 氏が行った「Teach every child about food」を教材とすることで、社会問題についての知識を理解し、自分の既存の知識と照らし合わせ、相手の意見を聞き、自分の意見を述べるができるようになることを目標とした。また、言語要素としては、イギリス英語特有の発音や表現に慣れ親しみ、ナチュラルスピードの英語を聞いて理解することを目指した。授業構成は、①Warm-up Question ②Vocabulary Building ③Comprehension Questions ④Comprehension Check ⑤Discussion の流れである。次節では、これらの授業構成の内容を説明する。

3.3 Warm-up Question

まず、① Warm-up Question では、学生の既存の知識を喚起することが重要である。大学生の場合、教材内容について、すでに様々な知識を母語にて獲得しており、その知識を英語で表現しようとするプロセスが必要である。以下は、筆者がWarm-upで用いた質問文である。学生は、これらの質問文を利用して、ペアで5分間のディスカッションを行う。まず、TED talk の講演者についての基本情報、タイトルからの内容の推測、キーワード「Obesity」についての基礎知識の確認を行う。次に、学生自身の生活と学習内容との接点を作る質問についての議論を行う。例えば、「どのくらいの頻度でファストフードを食べるか?」「料理はするか?」「レシピや材料はどのようなものか?」などについてペアで話し合うことで、動画の内容と学生自身のことについての関連性を持たせることができる。授業の導入部分で学習者と学習内容の接点を作る事は、学習意欲を高めるために不可欠な活動であると考えられる。また、質問文に関してペアで自由に話すことができることから、英語を話すことに対する抵抗を和らげ、学生の発話量の増加を促すことができ、学生の主体性を促進することができる活動となっている。

〈Warm-up Question〉

- What do you know about Jamie Oliver?
- Read the title and guess what the talk will be about?

- What are diet related diseases? What does obesity mean?
- Do you like junk food and how often do you eat it? Is it healthy?
- Do you ever cook? What is your specialty?

3.4 Vocabulary Building

② Vocabulary Building では、内容理解に必須と考えられる単語、スラングやイディオム表現について、英英辞書を用いて意味を調べる活動を行った。学生は英和辞書を主に使用する傾向にあり、英英辞書を用いることが少ない。そこで、英英辞書を用いて単語の意味を書き出し、ペアで確認しあう作業を行った。英英辞書を引くという能動的な活動を行うことで、「英語で考える」習慣を身につけることを目的としている。また、ペアでの確認活動では、英語で調べた意味をアウトプットすることで、語彙の理解と定着を促すものとなっている。以下は、本授業でピックアップした語彙である。8つの単語：purveyor（業者）、movers and shakers（影響力のある人々）、the eye of the storm（問題などの渦中にある）、tangible（実態的な）、processed（加工された）、the time is ripe（機は熟した）、additives（添加物）、reboot（再起動させる）、rant（どなり立てる）の意味を英英辞書を用いて調べさせた。次の3つのイディオム表現：movers and shakers（影響力のある人々）、the eye of the storm（問題などの渦中にある）、the time is ripe（機は熟した）では、比喩的な要素があり、単語の文字通りの意味と、イディオムとしての意味との関連性について考えさせる時間を設けた。

3.5 Comprehension Questions & Comprehension Check

内容理解を中心とした活動が③Comprehension Questionsと④Comprehension Checkである。動画の長さは18分間に及ぶため、前半と後半に分けて視聴した。まず、内容について大まかに理解するため、「この動画の主題は何か」という質問を問いかけておく。次に、詳細について聞き取るために、事前にComprehension Questionsに目を通す活動を行う。以下は、Comprehension Questionsの一部である。学生はこれらの質問文に事前に目を通し、ペアで内容を確認した後で、動画の視聴を行う。動画の視聴の後、互いの答えをペアで確認し、クラス全体で話しあう活動を行う。

〈Comprehension Questions〉

- What is the main idea of this talk?
- What does the bar chart show?
- What does the diagram tell you?
- Complete the triangle presented in the speech.
- What was food like 30 years ago? What has changed since then?

3.6 Discussion

最後に、動画の内容を理解したうえで、次の質問文を活用しながらディスカッションを行う。以下は、ディスカッションで使用した質問文の一部である。ペアやグループを変えながら、クラスの様々な学生と意見を交換する活動を行う。Warm-upで行ったディスカッション活動と比較すると、動画から得た情報を状況に応じて使用する必要があるため、より深い思考力・判断力を要する活動となっている。

〈Discussion〉

- What is the main idea of this talk?
- What seems to be the problem with the American food culture? Is Japan facing the same problem?
- Is obesity a preventable disease? How?
- Should life skills like cooking taught at schools? Why?
- According to Jamie Oliver, what can be done to fight obesity? Do you agree with his idea?
- What do you think we can do to prevent diet related diseases?

4 授業実践のまとめ

上記の授業プランを用いて実際に授業を行った際の効果と課題について述べる。まず、授業の効果についてであるが、学生の発話量が授業全体の約6割を占めていた点があげられる。従来の座学スタイルの授業と異なり、学生自身が英語の産出活動を行う時間を多くとることができた点は、アクティブ・ラーニングの学生の主体性を重要視する理念に沿うものであると考える。また、学生自身が動画を見て得た新しい知識を、自らの既存の知識と関連づけて発信する機会を設けたことで、より能動的な思考と判断力を要する活動となった。さらに、ペアやグループ活動を複数回取り入れることで、様々な意見に直面し、状況に応じた

英語表現を用いることができていた。学生からの口頭での授業後の感想によれば、動画の内容は難しく、言いたいことがなかなか出てこないもどかしさはあるが、自ら考えて英語で表現しようというプロセスが、英語力を鍛えるよい機会になっている、ということであった。課題としては、英語の産出活動の際に、文法や表現などの間違いに対する意識が低くなりがちな点である。この点に関しては、授業後に日本語で説明を加えるなどの対応が必要であると考えられる。また、このようなアクティブ・ラーニングを用いた授業実践の効果については、授業観察や記録および発話量の測定などの質的量的な研究をもって、更なる検証を行う必要があるだろう。次章からは、私立大学で外国人講師が行った、内容重視の教授法を用いた、アクティブ・ラーニングの実践例（２）を紹介する。授業プランは英語にて記述する。

5 実践例（２）：内容重視の教授法を用いた英語授業の実践例

5.1 Content Based Active Learning in Academic English

Language active learning encourages classes to be innovatively interactive, actively participative and creatively collaborative in methods and approaches in the lessons. The ultimate goal is for the students to activate passive vocabulary, grammar and expressions through controlled or uncontrolled discussions. Students are likewise encouraged to politely disagree when an opinion differs with theirs. The main strategy is for the students to learn the language from each other.

In an active learning situation, students are encouraged not to hesitate to express themselves in English and to build their confidence in presenting their opinions without the fear of grammatical errors, fluency and pronunciation.

In my Academic English classes, I had students with various nationalities. I once had a class of students from China, Korea, Nepal, Philippines, Vietnam and Japanese. What made the class interesting and challenging to teach were the various English levels, background, accents, pronunciation, grammar knowledge, vocabulary and individual experiences of the students. Their opinions on many of the topics

were either very different, similar or the same. These were entirely rooted to their cultural identities, social background, interests and knowledge on topics which were to be taken in class.

Among the topics taken include:

- Communication Studies
High and Low Context Communication, Media, Language Change, International Business Meetings
- Public Health
Immunity, Diets, Food Addictions, Sleep Deprivation, Lifestyle
- Psychology
Phobias, Intelligence and Talent, Memory
- Business and Economics
Team vs. Individual, Financial Stability, Global Marketing
- Sociology
Success, Name Value, Marriage

6 Teaching Approaches and Order

Approaches need to differ in each class. It depends on the content of the topic and finding the most interesting springboards to get the students actively involved.

6.1 Warm up and Group Sharing

To begin each class the topic to be taken is presented and questions are asked to the students to find out how much their knowledge of the topic is. The springboard is for the students to get involved with the topic. Responses are noted for later reference. There is no discussion at this point of the lesson yet.

- What is poverty?
- What can be social or moral consequences of poverty?
- What does lifestyle mean to you?
- What do you personally mean when you say the word “success” ?
- What are ways to study a language?
- What is culture shock?
- What are your culture shock experiences?

A set of yes or no, agree or disagree questions can also be used to stir interest in the topic. A short survey can also be used as starters with a choice of answers. For example: always,

sometimes, often, hardly, never. The survey may be used later in discussions by comparing answers and explaining them. Ranking of choices is another approach to have students explain themselves. Grammar points, vocabulary meaning and usage, pronunciation are passingly reviewed for clarity and understanding.

6.2 Shared Reading and Summarizing Reading Material Content

Should there be an audio script or reading material, this can be taught by grouping the students and have them alternately read the material. They can also in the process of reading explain the meaning of what they have read or probably ask questions to help each other comprehend.

This is followed by a summary of the topic material by the teacher to further help the students understand the topic. Lecture is very minimal. Questions are thrown to students to keep them alert, follow the flow of the lesson and to check how much they really understand. Asking opinions are avoided as they are later shared in group discussions.

The class is once again grouped according to different nationalities or language levels. It is sound to mix nationalities, language levels, and groups of 3 or 4 to enable students to listen from other cultures, to learn language from the better ones and to have more chances to speak. While the discussion is in progress, take note of the opinions mentioned or questions asked to be presented as wrap up after their group work.

6.3 Using Audiovisual Teaching Material and Note Taking

When using audiovisual materials, have the students watch the whole material. As they watch, they take notes. The audiovisual material can be presented in the following order a) without subtitles b) with subtitles c) without subtitle. Students compare notes which they have taken down and discussed. Should there be a need to show the material again, repeat the same order. It is imperative

the students get a full grasp of the content. A set of questions can be prepared to assist the students in their discussions.

To wrap up, a classwork summarizing the important points mentioned in the material and getting everyone to listen to opinions made in other groups. Again, watch the video without subtitles.

7 Role Play

Role play is an interesting and fun way to have students further develop their confidence and fluency. Have the groups write a script of their discussions. Students submit these scripts for correction. The corrected scripts are returned and rewritten. After which students rehearse their parts and perform in front of the class. Though memorization is not required, students are encouraged not to fully look at their copies while performing. They must try to just glance at their parts and deliver them using eye contact, with proper pronunciation, intonation and emphasis.

Questions can be asked after all the performances by asking, "What do you think of opinion?", "Who disagrees with?", "Do you agree or disagree with....?"

8 Composition

At the end of each topic, students are tasked to write a composition about the topic. This composition is submitted to be checked. Students rewrite their checked works. This is later shared and read by everyone. Questions can be asked what they think about the compositions.

Small group or class discussions with proper guidance and creative language activities motivate students to willingly express themselves without the fear of language errors and of being understood. The goal of active learning in these type of classes is to have everyone speak, share, agree or disagree in a language they are learning. Audiovisual materials simultaneously develop both listening and reading skills. Through participation, they improve their speaking

skills in expressing themselves and listening skills by listening to other opinions.

9 まとめ

本稿では、大学の英語授業にアクティブ・ラーニングを取り入れた実践例を提示した。日本人講師によるオーセンティックな英語教材であるTEDを用いた授業、また外国人講師による内容重視の教授法を用いた授業方法について紹介した。アクティブ・ラーニングの定義からも明らかのように、その内容は幅広く、学習者の目的やレベルに応じて教師が柔軟に授業に取り入れることが求められている。また、前述したように、アクティブ・ラーニングを用いた授業の効果については、授業観察や発話量の測定などを用いて、詳細な検証を行う必要があると考える。

参考資料

文部科学省 (2013) 『用語説明』

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/05/13/1212

(最終閲覧日：2018.12.20.)

TED Talk: 「Teach every child about food」

https://www.ted.com/talks/jamie_oliver?language=ja (最終閲覧日：2018.12.20.)